第3294号

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
〔購読申し込み・お問い合わせ〕
http://www.kyobun.co.jp/
〔購読料・月額〕2,500円＋税
©教育新聞社 2014

子どもの多様な見方を生かす社会科授業

第4回

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 譲治

その場に立って見えてくるもの

「高まった平氏への不満」とは、どの本にも書かれている頼朝旗揚げの理由だが、「それだけだろうか…」、そう思いながら、私の住む神奈川県内を歩いたことがある。

最初に気づいたのは、石橋山合戦に頼朝の味方となった武士たちが、いずれも丘陵地帯の豪族であったことだ。三浦大介と呼ばれた義明の三浦半島。その弟、義實の住む岡崎（現平塚市岡崎）、その子、義忠が住む佐奈田（現平塚市真田）、その母は小田原の中村氏、中村氏一族の土屋（現平塚市土屋）と土肥（現湯河原市）の二氏、いずれもが相模平野の縁辺部に居を構えている。

「地図を見れば分かるじゃないか」と言うわけにはいかない。岡崎からは真田が見える、真田からは土屋が見える、土屋からは中村の領地が、そのどこから見ても平野部が見渡せることなど、実際にその場に立たないと到底気付けることではない。

一方、反頼朝の大庭景親に加わったのは、渋谷重国、俣野景久、毛利景行、曽我助信など、いずれも広い水田を抱える平野部の豪族たちである。言い方を代えれば頼朝旗揚げ時の戦は、相模の「畑作豪族」対「稲作豪族」ということになる。

やや力のある三浦氏本体を除いて、稲作豪族の方が圧倒的に優勢なのはいうまでもない。石橋山で頼朝軍が敗れたのは、三浦氏と合流できなかったからである。断っておくが、ここに書かれている豪族は全て平氏なのだ。つまり源平の戦いは源平の戦いではないということだ。「持てる者と持とうとする者の戦い」なのだ。

血縁を重んじる当時にあって、頼朝が貴種で有ることは重要だが、ただそれだけのことで命を懸けるほど当時の武士は甘くはない。どちらが有利か思案するのが優れた武将であり、判断に困ったときは親子兄弟に別れて、勝者が敗れた縁者の命乞いをする合理性を持っていた。ところが、畑作豪族たちは一丸となって頼朝についた。新しい領地を求めてイチかバチかの賭けに出たというわけだ。

一方、大庭側では、景親の兄景義は頼朝側、渋谷重国は息子たちを頼朝につかせた。つまり彼ら「持てる豪族」たちは保険をかけたのである。このことは功を奏して、彼らの領地は戦後安堵された。もちろん畑作豪族たちに他国の領地が新恩給与されたことはいうまでもない。菜の花やレンゲの花咲くのどかな田園風景も、こうした眼で見ると、「彼らを動かしていたものが何であったのか」、武士の時代の根幹がおのずと見えてくる。

実際にその場を見聞するということは、教師にとって大切な勉強である。「京浜工業地帯」も「庄内平野の米作り」も、「古墳時代の国つくり」も「長篠の合戦」も、文字面の出来事ではなくなり、新しい教材観が必ず芽生えるだろう。忙しい先生に「その場に立って空気を吸ってこい」などとはなかなか言えないことだが、一カ所だけでもよい。「そこで何かを感じ、つかむことができたら」、授業の中身もずいぶんと変わる。皆さんの近くにも授業改造のタネはたくさん転がっている。